

愛着の安定性について

井 森 澄 江

The Stability of Infant-Mother Attachment

Sumie IMORI

(Received September 30, 1991)

はじめに

最初の一年に母親と結ぶ愛着関係が、その後（特に幼児期）の子どもの個人間、個人内能力の発達といかに関連するかについて、Ainsworth, M. & Bell, S. (探索行動との関係), Yarrow, L. (社会対人行動との関係), Pastor, D. (仲間との関係), Main, M. & Londerville, S. (大人との関係), Arend, R. A., Gove, F. L. & Sroufe, L. A. (コンピテンス及びパーソナリティーの発達との関連)らが研究を行っている。その中で、生後一年目に母親と安定した愛着関係を結んでいる（安定愛着の）子どもは、幼児期の諸能力に優れるといったことほかに、安定愛着の子どもの母親が、最初の一年だけでなく、幼児期においても、そうでない母親に比べて子どもとよい関係を持ち、適切な支持及び指示を子どもに与えていることが示されている。このことから、安定愛着の子どもの発達の優位性には、単に一年目に形成される母子関係のみでなく、その後の各時点での安定した母子関係が関連していると考えられる。しかし果たして、最初の一年に形成された安定した（または不安定な）母子関係は変動しないのだろうか。これまでの研究は、母子の愛着関係の不変性を前提に議論を進めていると思われるが、本論ではその点を検討してみたい。

1. 愛着関係を測定する方法

そのためには、愛着関係を評価する方法が必要なわけだが、これを評定する標準化された実験室的手法としてストレンジ・シチュエーション (The strange
発達心理学研究室

situation) という方法がAinsworthによって1969年に開発されている。¹⁾ 1才児の愛着を評価するための基準を与える優れた手法として、以後、多くの母子関係に関する研究に用いられている方法である。そこで、まずこのストレンジ・シチュエーションとは何かを示しておく。

(1) ストレンジ・シチュエーション

ストレンジ・シチュエーションは約20分ほどの短い手続であり、おもちゃの置かれた気分のよい実験室での8つのエピソード場面（1.観察者が子どもを抱いた母親を同行し入室、母子を残し退室。2.母親は子どもをおろしイスにすわる。3.見知らぬ女性Sが入室、イスに座り、母親と話し、子どもに近づく。4.母親はハンドバッグを残し退室。5.S退室、母親入室、母親再び退室。6.子どもがひとり残される。7.Sが部屋に戻る。8.Sと入れ替わりに母親が部屋に戻る。）で構成されている。1と2は実験室で母子のみでいる場面、そのうち2は母親から分離する前の子どもの探索行動の程度を引き出すことが意図されている。3では見知らぬ女性Sが部屋に入ってきて、はじめの1分はイスにすわり静かに雑誌を読む、次の1分は母親と会話をかわし、最後の1分は子どもと遊ぶよう試みる。次の4は最初の母親との分離事態。子どもが悲嘆を示す場合、Sはそれを紛らしたり慰めたりするが、そうでない場合Sはでしゃばらない。5は母親と子の最初の再会場面、またSはこの時点で退室するので母子のみの場面でもある。再会時の子どもの母親に対するあいさつ行動、もし悲嘆・混乱していた子どもなら、それをもとにもどす能力、探索に戻る能力に注目する。6では子どもが全く一人で残される。続いて7ではSがもどり、8は母親と2回目の再会の事態である。

(2) 愛着の評価手続と愛着の型-A・B・C群

愛着関係の具体的な評価手続は、(1)でのベタストレンジ・シチュエーションで子どもが示す行動によって、子どもをタイプに分類するというかたちをとる。とくに、母親との再会場面での子ども行動が重視され、分類わけが行われる。これにより全部で8つのタイプが見出されている。ただし大分類の際にはA・B・Cという3群にわけられる。このA・B・Cという群名は、この評価のための研究がはじまった。1969年時点において、Ainsworthらが早まったレッテルをはることを避けるため、便宜的に用いた記号であって、愛着関係の量・質の順位がA、B、C順に多くよいものになっているということではない。この3群の特徴は以下の通り。まず、B群は、分離が行われる前の母親と一緒にいる場面では、あまり愛着行動は示さず、おもちゃへ積極的に探索行動をおこす。母親はその探索のための安全基地として使用されていると考えられる。母親と分離の場面では、母親を求め行動が強くなり、探索行動はほとんどみられない。狼狽・悲しみ、苦痛が示されることが多い。そして、母親と再会の場面では、母親に身体接触を求めたり、母親と相互関係をもつことに強烈な関心を示す。母親が戻ってきたことに対して強く反応をあらわす群である。ストレンジ・シチュエーションで1才児がとるだろうと期待された行動をまさにとった群でもある。Ainsworthの1978年の研究²⁾では108人というサンプルの66%がこのB群であった。最も大きな規範的群だといえよう。これに対

して、C群は、サンプルの12%を占めるにすぎず、最も小さな群である。この群の子どもたちは、母親との分離がおこなわれる以前の場面ですらもうすでに不安を示す。母親との分離場面ではさらに非常に強い狼狽、苦痛をあらわす。そして、再会場面では、B群の子どもと同様に母親に親密な身体的接触を求め行動がみられる。と同時にB群にはみられない接触や相互関係をもつことに対する抵抗的・反抗的態度もみられる。すなわちアンビバレントな態度。行動がこのC群の特徴である。最後にA群は、ストレンジ・シチュエーションで1才児がとるだろうと期待した行動を全然とらなかった子どもたちの群である。特に母親との分離場面では全くといってよいほど、狼狽や苦痛を示さない。また、これが最も重要なことであるが、再会の場面で母親と接触したり、接近することを避けるのである。さらに、相互に関係することすら避ける傾向もある。この群の子どもの中には一貫して母親を無視し、母親が子どもをおだてようと近づいた時にもその接近を拒んだり母親を見ることすら拒むものもいる。が、中には、母親回避の行動と母親への愛着行動がிரிまじったような行動をとるものもいる。代表的な特徴としては母親を回避する行動を示す群といえよう。1978年のサンプルでは約20%の子どもたちがこのA群に分類された。すなわちB群は安定愛着群、A、C群は不安定愛着群、そのうちA群は回避群、C群はアンビバレント群といえるわけである。なお表1.にいくつかの文化における愛着の型の割合³⁾を示した。

表1. 愛着の型の分類の異文化間比較(%)

国名	愛着型A	愛着型B	愛着型C	分類不可	人数	月数	調査年
アメリカ合衆国 ドイツ	22	66	12	—	102	12	1978
a) ビールドルフ	49	33	12	6	49	12	1981
b) レーゲンスバーグ	31	59	6	0	50	12	1982
スウェーデン	22	74	4	—	51	11~13	1982
イスラエル							
a) キブツ	8	57	34	1	83	11~14	1985
b) 保育所	3	80	17	0	36	12~13	1985
日本							
a) 札幌	0	62	38	—	29	12	1981~82 1985
b) 東京	13	62	18	8	39	12	1984

2. 愛着の型の変動

(1) 中流階層での研究

Waters⁴⁾は中流階層の子どもにおいて、ストレンジ・シチュエーションを用いた次のような手続きで愛着型の変動について調べている。

まず、生後12か月の時点でストレンジ・シチュエーションでの①愛着に関する特定の行動の生起を調べ(時間標本法による)②7段階評定によって愛着(相互交渉)行動カテゴリーの評定を行い、③Ainsworth1978の分類体系を用いて愛着の型を決定する。そして、その子どもたちが18か月になった時点で、観察者(評定者)を変えて同様の①観察、②評定、③分類を行う。こうして得られた、①②③各々の二時点のデータを比較する。その結果を示したのが表2, 3, 4である。

① 愛着に関する特定の行動

みる・発声する・ははえむ・身振りですす・接近を求める・触れる・すがりつく、といった愛着に関する特定の行動の生起については表2に示すように、分離前の母親に対する発声・微笑・接触及び再会時のみしらぬ人に対する微笑といった幾つかの行動に相関がみられるだけであった。全体的にみれば、12か月と18か月の間に行動の生起に一貫性は示されなかったのである。

表2. 愛着に関する特定の行動
12か月時と18か月時の相関

行 動	母 親		みしらぬ人	
	分離前 (7分)	再 会 (6分)	分離前 (3分)	再 会 (6分)
注 視	.070	.220	-.050	.110
発 声	.360*	-.071	.121	.240
微 笑	.462**	-.160	.200	.682**
身 振	.120	-.110	-.087	-.100
接 近	-.153	.040	.113	.090
接 触	.444**	.110	—	.260
すがりつく	—	.260	—	-.080

*P<.05 **P<.01

② 相互交渉行動のカテゴリーの評定

しかし、接近・接触を求めるか、回避しようとするかといった相互交渉行動に対する評定では表3に示すように12か月と18か月時の相関は全体的に高い。特に母親との再会時にとる行動には全て高い相関が示されており、安定性が認められるのである。また、子どもの泣きについても12か月時と18か月時で一貫性が示されている。

③ 愛着の型

愛着の型は②で述べた相互交渉行動と泣きのパターンに基づいて分類がなされるのだが、表4をみてわかるように12か月時と18か月時で異なった群に属すると判定された子どもは、A群、B群、C群という大分類では50人中たった2人にすぎなかった。また、8分類法でも50人中30人は同じ群に分類され、愛着の型にも一貫性があることが示された。

つまり、①の愛着の関する特定の行動以外については一貫性が認められるのである。そして変化のみられた特定の行動すなわち具体的な行動については、子どもの成長、発達により変化するのが当然なのであり(この具体的な行動の変化については同様の結果がMastersらによっても報告されている)、母子の愛着関係、愛着型自体は変動しないことがこの調査では示されたのである。

このWatersの研究では、研究調査の対象は両親ともにそろった、母親の年齢は22歳~30歳の、中流家庭の子どもであった。つまり子どもと母親を困む社会的環境はかなり安定していると考えられる層を被験者としていた。Watersも論文の中でいっているのだが、ここで示された母子の愛着関係の一貫性は、母子をとり囲むより広い社会的文脈の安定性に支えられたものであったのかもしれない。もし、社会環境に変動がおこるような場合はどうなのだろうか。

(2) 下層での研究

Vanghn⁵⁾は、環境に変動が生じやすい下層の母子100組でこの愛着関係の一貫性(子どもの12か月時と18か月時の違い)を調べることにした。被験者の家庭は、その半分以上が生活保護を受けており、母親の年齢は12歳(22歳の誤りではない)から37歳。夫と暮らしているものは子どもが18か月時で53%。また、少なくとも27%の家庭では、12か月から18か月の間に、一緒に暮らす人が変わっている。住居もこの間38%については少なくとも一度は変えている。更に12か月の時点で27%、18か月の時点で31%の母親が働きに出ていた。この研究でも12か月と18か月の2時点でストレンジ・シチュエーションを用いて愛着関係を評定している。それに加えて18か月時にストレスを与えるような出来事に関する調査(仕事、家族及び隣人、経済上の問題、法にかかわる問題、健康に関する44項目からなるチェックリスト)を母親に実施した。これにより、子どもが12か月から18か月の間に起ったストレスを与えるような出来事が記述され、養育環

表3. 相互交渉行動の評定
12か月時と18か月時の相関

注 交渉行動のカテゴリ	母	親		
	分離前 (4分)	再会 (6分)	分離前 (3分)	再会 (6分)
PS	.423**	.303*	.033	.286*
CM	.720**	.300*	-.020	.320*
PA	-	.621**	.207	.229
CR	-	.508**	-.056	.274
DI	.065	.308*	.180	.319*
	分離前 (7分)	分離 (9分)	再会 (6分)	
泣き	.765**	.411**	.425**	

*P<.05 **P<.01

注：交渉行動カテゴリ（7段階評定）

- PS (Proximity seeking): 大人との身体接触又は接近を求める子どもの努力の強さ、持続性の程度。
- CM (Contact maintaining): 大人と一たん身体接触が得られた後、それを維持しようとする子どもの努力に関する活動と持続性の程度。
- PA (Proximity and interaction avoiding): 再会時に接近又は、交わることを自発的に避けようとする強さ、持続性などの程度。
- CR (Contact resisting): 接触、接近しようとする人に対する子どもの否定的（特に怒りのサインを伴った）行動の深さ、頻度、期間。
- DI (Distance interaction): 接近せず大人への肯定的興味を自発的に表示（微笑、発声、ジェスチャー、あそびなどを含む）。

表4. 愛着の型 12か月と18か月の分類

12か月 \ 18か月		A群		B群				C群	
		A1	A2	B1	B2	B3	B4	C1	C2
A群	A1	1	3	0	0	0	0	0	0
	A2	2	3	0	0	1	0	0	0
B群	B1	0	0	2	0	1	0	0	0
	B2	0	0	2	6	1	0	0	0
	B3	0	0	2	1	8	0	0	0
	B4	0	0	1	0	0	6	0	0
C群	C1	0	0	0	0	0	0	3	1
	C2	0	0	0	1	0	0	4	1
		9		32				9	

境の変動性が、チェックされた項目の総数として得点化されることになる。これをストレス得点と呼ぶ。この得点が高いほど環境の変動は大きい。この愛着型の変動及びストレス得点の結果を示したのが表5、6である。

表5. 愛着の型 - 12か月と18か月の分類

12か月 \ 18か月		18か月			計
		A	B	C	
12か月	A	11	10	2	23
	B	7	45	3	55
	C	5	11	6	22
計		23	66	11	100

表6. 愛着の型の一貫性、変動とストレスを与える出来事（母親の報告）

愛着の型		人数	ストレス得点（平均）
12か月	18か月		
B（安定）→ A又はC（不安定）		10	10.00
A又はC（不安定）→ A又はC（不安定）		24	6.83
A又はC（不安定）→ B（安定）		21	6.04
B（安定）→ B（安定）		45	4.87

まず、愛着型の変動だが、表5をみてわかるように、100人のうち62人は12か月時と18か月時に同じ愛着型に分類された。変動率38%、この数値は愛着の型はかなり安定していることを示している。特にB群は、変動したのは55人中10人、変動率18%であり、安定性が高いといえよう。しかし、これを(1)の中流階層での研究の変動率4%（50人中2人）と比べると、安定性は有意に低いのである。また、その愛着の型の変動は、ストレスを与えるような養育環境上の出来事の生起と関係していた（表6）。一貫してB群（安定愛着群）に分類された45人の子どもの母親のストレス得点が平均4.87なのに対し、12か月時ではB群、18か月時ではA又はC群（不安定愛着群）に分類された10人の子どもの母親のストレス平均得点は倍の10.00であった。

このことは、愛着型の一貫性は否定はしないものの、それを方向づける条件というものを特定化することの重要性を指摘する。ある場合には一貫性は強められ、またある場合（例えば、ストレスを与えるような環境条件の変化を受けた場合など）にはそれは弱められるのである。

結局、母子の関係は、そのきずなが結ばれた後も発達しつづけるもので、どちらかの行動が変わればその影響をうけ、関係そのものが変化することもありうるとVanghnらは考察している。

このVanghnらの研究では、下層階級の劇的な家庭環境の変化が愛着関係の一貫性に与える影響を調べている。これに対し、Thompsonらは中流の家庭で普通に起こる家族の変化やストレスを与える出来事が愛着関係の安定性にどんな影響を与えるかをみている。

(3) 中流階層での家庭環境変化の影響

Thompson⁶⁾らは、様々な職種の中流家庭の母子43組（男子21名、女子22名）を被験者とし、生後12か月半と19か月半の二時点でストレージ・シチュエーションを用

いて、愛着型を評定する方法とともに、母親に質問紙を実施して家庭環境や主養育者の変化等を調べている。なおThompsonらの用いた質問紙は次のような領域からなっている。(a)家庭環境の変化；養育面（母親が仕事に復帰したか、主たる養育者が変わっていないか等）及び一般的家庭環境（ひっこしをしたか等）(b)特別な経験の有無；24時間以上母親と離れたことがあるか等。

表7に2時点の愛着型の分類分布を示した。各月齢の愛着型の分布はAinsworthらのものと同じであるが、2月齢で同じ型に分類されたのは43人中23人でたった53%にすぎない。これは大分類法の結果だが、8分類法で見ると一致率はさらに減少、僅か26%である。愛着型の安定性は近いといえよう。これは(1)で述べたWatersの結果に反するが、Waters自身もWatersの中流階層での調査の被験者は家庭のストレス・変化が生じる可能性が最小になるように選ばれたという指摘をしている（Vanghn et al., 1979）ことから、このThompsonの結果の方が、ごく一般の家庭での母子関係の変動の様子を正しく表わしているのではないかと思われる。担し、そういきるには調査を重ねる必要はある。

表7. 愛着の型 - 12.5か月と19.5か月の分類

12.5か月 \ 19.5か月	A	B	C	計
	A	1	5	1
B	5	20	5	30
C	0	4	2	6
計	6	25	8	43

さて次に、この愛着型の変動を質問紙との関係でみてみると、表8に示した通り、12.5か月～19.5か月の間に5人の母親が仕事に復帰しているが、そのうち4ケースにおいて子どもの愛着型が変化している。また愛着型の変わった子どもは20人だが、そのうちの半分以上、12人は19.5か月までに母親が仕事に戻っている。一方、母親が仕事に戻っても愛着型が変わらなかったのは3人のみ（変化なし23人中の15%以下）である。同様に、愛着型の変った子どもの半分以上、11人は主養育者が変わる（毎週15時間以上、父親、親類、ベビーシッター、保母等に養育される）経験をしている。主養育者が変わっても愛着型が変わらなかったのは2人だけ（変化なしの12

%以下）であった。母親の仕事への復帰、主たる養育者の変化（母親から母親以外の人へ）といったことは多くの家庭で起こっている。そしてそれらは愛着型に変化を生じさせることが多いことをThompsonらの結果は示したのである。これに対して、母親と24時間以上の分離といった出来事や新しい家への引っ越し等は愛着型の変化と関連していなかった。Thompsonらは、ここで重要なことは、母親の仕事への復帰、主たる養育者の変化というような出来事に関連した愛着型の変化は、表8をみてわかるように、両方向に、即ち、安定型から不安定型へだけでなく、不安定型から安定型へという方向にも起こるといことであるという。

表8. 愛着型の一貫性・変動と
母親の就労・主養育者の変化

12.5か月	19.5か月	人数	12.5か月以前		12.5か月から19.5か月の間		
			母親の就労	主養育者の変化	母親の就労	主養育者の変化	
A (不安定) —————→ B (安定) ——— 9 C (不安定) —————→ C (不安定) ——— 1	変化	10	5	3	2	2	
B (安定) —————→ A (不安定) ——— 5 C (不安定) —————→ C (不安定) ——— 5							
A (不安定) —————→ A (不安定) ——— 1 C (不安定) —————→ C (不安定) ——— 2	一貫	3	0	2	0	0	
B (安定) —————→ B (安定) ——— 20	一貫	20	2	0	1	0	
		計	43	10	9	5	4

つまり、最初の一年間に形成された母子関係は変化する。例えば先に示した乳幼児期の養育上の出来事によって、そしてそういった出来事は、母子関係の再交渉の力となってある場合には、安定愛着を不安定愛着へ、またある場合には不安定愛着を安定愛着へと母子関係を再形成させる機会を与えるのである。

その意味では、母子関係の一貫性を前提として示された生後一年目の安定愛着の子どもの優位性（いいかえれば、生後一年間に形成される母子関係が子どもの後の能力を決定する）を絶対視するのは誤りであろう。子ども

も母親も関係を再形成する能力をもっているものであり、最初の一年も大切ではあるが、一年を過ぎて再構成された母子関係が子どもの諸能力の発達に影響を与える場合も大いにありうるのである。

引用文献

- (1) M.D.S. Ainsworth and B.A. Witting : Attachment and exploratory behavior of one-year-olds in a strange situation. In B.M. Foss (Ed), *Determinants of infant*

- behavior* IV, New York · Barues & Noble
Bovks 1969.
- (2) M.D.S. Ainsworth, M.C. Blehar, E.
Waters and S. Wall : *Patterns of attachment*.
Hillsdale NJ : Lawrence Erlbaum Associ-
ates, 1978.
- (3) R.A. Tompson and M.E. Lamb : Infant
-Mother attachment : New Directions for
Theory and Research, *Life span development
and behavior* Hillsdale, NJ : Lawrence
Erlbaum Associates 1986.
- (4) E, Waters : The reliability and stability
of individual differences in infant-mother
attachment. *Child Development*, 49. 1978.
- (5) B. Vaughn, B. Egeland, L. A, Stroufe
and E, Waters: Individual differences in
infant-mother attachment at twelve and
eighteen months : Stability and change in
families under stress. *Child Development*
50. 1979.
- (6) R.A. Tompson, M.E. Lamb and D. Estes
: Stability of infant-mother attachment
and its relationship to Changing life
circumstances in an unselected middle-
class sample. *Child Development*, 53. 1982.